

事態に対する話者の期待と感情・評価的意味 - 理想化認知モデルの観点からの考察 -

鈴木 智美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

tmsuzuki@tufs.ac.jp

1. 事態の「予測性」および「望ましさ」に関わる感情・評価的意味

本稿では、現代日本語の種々の形式に観察される感情・評価的意味の中から、事態の「予測性」および「望ましさ」との関わりを持つ意味に着目し、「理想化認知モデル」の観点から、事態に対する話者の期待と、感情・評価的意味との関連について考察することを目的とする。

事態の「予測性」および「望ましさ」と関わりを持つ感情・評価的意味とは、以下のような例に観察されるものである。

- (1) 友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれてしまった。
- (2) ユビキタスだのアウトソーシングだの、新しいカタカナ語が増えてきている。
- (3) そんな立派な賞をもらえると思っていたなかった。
- (4) あらためて私から解説めいた話をしなくてもいいですね。

例(1)からは、予想外なことに対する話者の驚きや戸惑いなどの意味が読みとれる。例(2)では、馴染みのないカタカナ語が増えてきていることについて、話者が戸惑いをおぼえているか、またはそのような状況を若干揶揄するかのような意味が読みとれる。例(3)には、受賞を予期していなかったための驚きの意味が観察され、例(4)では、話者が、話が「解説」の様相を帯びることをふさわしくないと考えており、それを自嘲的に述べるような意味合いが伴う。

ここでは、補助動詞「しまう」、並立助詞「だの」(～だの～だの)、指示詞「そんな」、接辞「めく」など、いずれも何らかの生産的な形式が用いられ、話者の「驚き」「困惑」「揶揄」「自嘲」などの感情・評価的意味が伴うようになっている。次の(1')～(4')のように、これらの形式を削除するか、別の形式に変えて述べると、感情・評価的意味は消え、中立的な表現に変わる。

- (1') 友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれた。
- (2') ユビキタスやアウトソーシングなど、新しいカタカナ語が増えてきている。
- (3') 立派な賞をもらえると思っていたなかった。
- (4') あらためて私から解説をしなくてもいいですね。

2. 事態の「予測性」および「望ましさ」に関わる理想化認知モデル

感情・評価の意味が伴う(1)～(4)のような例には、以下の(5a)あるいは(5b)に示されるような、ある共通の話者による事態のとらえ方が観察される。

- (5) 話者は事態を「予測通り」の「望ましい」ものととらえているかどうか：
- a. 話者は、事態を「予測通りではない」、あるいは「予測の範囲外」ととらえている。
 - b. 話者は、事態を「望ましい」ものではないととらえている。

事態が話者の「予測通り」、あるいは「望ましい」ものであった場合には、それを補助動詞、並立助詞、接辞など、何らかの生産的・機能的な形式によって示すのは難しい。

では、なぜ、事態はこれらの形式を用いることによって、話者の「予測通りでない」、あるいは「望ましくない」ものとして描かれるのだろうか。また、事態が「予測通りでない」時、なぜそこに「戸惑い」などの“否定的”な感情・評価的な意味が生じるのだろうか。

この2つの問いに対する答えとして、本稿では以下の(6)のような理想化認知モデルを仮説として立てる。「理想化認知モデル」とは、我々が世界を意味づけ、言語によって表現する際の基盤となる、組織化された知識構造のモデルのことである。

- (6) 「予測性」および「望ましさ」の観点から見た、事態のあり方に関する理想化認知モデル：
- a. 事態は、通常、話者の予測通りに進行・展開する。
 - b. 事態は、望ましい内容のものであることが、好まれる。

我々は、通常、事態は「予測通り」に進行・展開するものと考え、かつ、事態が「望ましい」内容のものであることを好むと考えられる。これを、「予測性」および「望ましさ」の観点から見た、事態のあり方に関する我々の一般的なとらえ方であると仮定すれば、このモデルからはずれた事態は、平均的・一般的な事態ではないということになる。理想化認知モデルからはずれた特異な事態について、我々がそれを何らかの有標の形式によって表すということであれば、それは十分に理解可能なことである。また、事態が「予測通り」に進行・展開すると考えられているのであれば、そうでない事態について述べる際に、「予測と違って、驚いた」「予想していないことなので、戸惑いを感じる」等の感情・評価的な意味が伴うことも納得のいくこととなる。

3. 理想化認知モデルの観点から見た事態のあり方とそれを表す表現

(6)の理想化認知モデルにしたがえば、事態には次の6通りのあり方が想定されることになる¹。

(7) 事態のあり方の可能性：「予測性」および「望ましさ」の観点から

a. 事態が、話者の予測通りに進行・展開する。

その事態内容は...
望ましい。
望ましさに関してはどちらでもない。
望ましくない。

b. 事態が、話者の予測通りではなく進行・展開する。

その事態内容は...
望ましい。
望ましさに関してはどちらでもない。
望ましくない。

理想化認知モデルに合致しているのは、a. および a. の場合のみである。b. は、「予測性」と「望ましさ」のいずれの点からも、理想化認知モデルから最もはずれたものとなる。

これらを、順に言語表現にあてはめて確認してみると、以下ようになる。第1節で観察した言語形式は、いずれも理想化認知モデルと合致しない状況においては、矛盾なく用いられる。

(8) 予想通り、(立派な) 賞をもらうことができた。

(a. あるいは a. : 「予測性」と「望ましさ」の点で、いずれも理想化認知モデルからはずれていない。)

(9) 友人の結婚式場で、予告なく、苦手なスピーチを頼まれてしまった。

(10) そんなひどい結果になるとは、想像もしていなかった。

(b. : 「予測性」と「望ましさ」の双方の点で理想化認知モデルをはずれている。)

(11) 友人の結婚式場で、案の定、苦手なスピーチを頼まれてしまった。

(12) ユピキタスだのアウトソーシングだの、意味のよくわからないカタカナ語が、やはり増えてきている。

(a. : 事態は予測通りだが、「望ましさ」の点で理想化認知モデルをはずれている。)

¹ 事態が「予測通りでない」ということには、「予測と反対」「予測通りのレベルに達していない」「予測の範囲外」ということが含まれる。

(13) 友人の結婚式場で、予告なく、スピーチを頼まれてしまった。

(14) まだ12月の初めなのに、町がもうクリスマスめいてきている。

(b. : 「予測性」の点で理想化認知モデルをはずれている。望ましさの点では中立的。)

(15) 友人の結婚式場で、思いがけず、素敵な人に会ってしまった。

(16) 目の付けどころがすばらしいのだ、文章構成力が優れているのだ、自分でも考えてもいなかったようなほめ言葉が並んでいる。

(17) 思いがけずそんなことまでしていただいて、感激です。

(b. : 事態内容は望ましいが、「予測性」の点で理想化認知モデルをはずれている。)

4. その他の形式

また、複合語「生～」には、名詞による修飾の形「生の～」には見られない、話者の期待からの逸脱を表す用法がある。

まず、「シャツが生乾きだ」「生かじりの知識では困る」の例に見られるように、「本来予測される完全なレベルに、十分に達していない」という、「完全性」の面で、話者の「予測通り」でない「望ましくない」事態を表す用法がある。これは、本稿で提示した理想化認知モデルの観点から言えば、「予測性」からの逸脱において、「程度性・段階性」が関わってくるものである。「中途半端である」「中途半端で気持ちが悪い」などの否定的な感情・評価の意味が伴う。

また、「本来、間に何かがあるものなのに、直接になっている」のように、「直接性」の面において、事態が話者の予測通りでないことを表す用法もある（「ミニスカートに生足では、見ての方が寒くなってくる」）。この場合も、「望ましくない」という感情・評価の意味が伴いやすいと考えられる。

参考文献

鈴木智美 (1998) 「『～てしまう』の意味」『日本語教育』97号 日本語教育学会 pp.48-59

鈴木智美 (2004) 「『～だの～だの』の意味」『日本語教育』121号 日本語教育学会 pp.66-75

鈴木智美 (2006) 「『そんなX...』文に見られる感情・評価の意味 - 話者がとらえる事態の価値・意味と非予測性 - 」日本語文法学会『日本語文法』6巻1号 くろしお出版 pp.88-105

鈴木智美 (2007) 現代日本語における接辞『めく』の意味・用法『東京外国語大学論集』第75号 pp.271-282

Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*.

Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論 言語から見た人間の心』紀伊國屋書店 1993年)